

観衆の妨害

2024/1/7

学童の三人制の試合で打者が内野ゴロを打った。遊撃手はそのゴロを捕り一塁へ送球したが、悪送球となって観客の方まで転がっていった。一塁手は送球を追いかけていったところ観客がボールを拾って一塁手へ投げて渡した。そこで球審はタイムをかけて試合を止めた。その時、打者走者は、二塁ベースまであと1mのところまで来ていた。さて、どのように処置をして試合を再開したらよいのだろうか？

規則書 6.01(e)「観衆の妨害」には、「打球または送球に対して観衆の妨害があったときは、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。」と明記されている。読者のなかには、野手の送球当時に占有していた塁から二つ先まで進めてと一瞬迷った人もいるのではないか。この試合では、協議の結果、妨害がなかったら三塁まで行くことができたと判断し、走者三塁で試合を再開した。

ワイルドピッチで二人の走者が進塁しようとした時の塁審の動き

2024/1/7

上記の三人制の試合で走者二塁一塁のとき、投手のワイルドピッチがあり、二走者とも次塁へ向かって走り出した。ショート前に位置していた塁審は勿論三塁のプレイを予期して移動を開始したのだが、さて、一塁の塁審はどのような動きをすればよかったのか？

一塁走者が二塁に向かって走り出すと同時に、内野内に切り込み二塁のプレイを受け持つことができるように移動できれば正解である。

走者が三塁にいるときの捕手の打撃妨害が起きた場合

2024/1/18

表題のケースでインプレイにするかボールデッドにするかどうかの規則の適用で以前から悩んできた。この瓦版や規則の学習でも取り上げてきたのだが、いまだに自分でも納得がいかないので、今回は規則を徹底的に検証してみることにした。まず、3塁に走者がいるときに捕手の打撃妨害が起きたときに適用される規則は、以下のものである。

5.05(b)(3) 【原注】 ①

1 アウト走者三塁、打者が捕手に妨げられながらも外野に飛球を打ち、捕球後三塁走者が得点した。監督は、打者アウトで得点を記録すると、走者三塁、一塁（打者が打撃妨害により出塁）とのいずれを選んでもよい。

6.01(c) 【注 2】

捕手（または他の野手）が打者を妨害した場合、打者には一塁が与えられる。三塁走者が盗塁またはスクイズプレイによって得点しようとしたときに、この妨害があった場合にはボールデッドとし、三塁走者の得点を認め打者には一塁が与えられる。

三塁走者が盗塁またはスクイズプレイで得点しようとしていなかったときに、捕手が打者を妨害した場合にはボールデッドとし、打者に一塁が与えられ、そのために塁を明け渡すことになった走者は進塁する。盗塁を企てていなかった走者と塁を明け渡さなくてもよい走者とは、妨害発生の瞬間に占有していた塁にとめおかれる。

5.06(b)(3)

次の場合、打者を除く各走者は、アウトにされるおそれなく 1 個の塁が与えられる。

5.06(b)(3)(D)

走者が盗塁を企てたとき、打者が捕手またはその他の野手に妨害（インターフェア）された場合。

6.01(g)

三塁走者が、スクイズプレイまたは盗塁によって得点しようとした場合、捕手またはその他の野手がボールを持たないで、本塁の上またはその前方に出るか、あるいは打者または打者のバットに触れたときには、投手にボークを課して、打者はインターフェアによって一塁が与えられる。この際はボールデッドとなる。

6.01(g) 【注 2】

すべての走者は、盗塁行為の有無に関係なく、ボークによって 1 個の塁が与えられる。

◎走者が三塁にいるときの打撃妨害を上記の記載を元に整理すると以下のようなになる。

スクイズ・盗塁行為あり

【原注】の解釈・・・**ボールデッド**、打者は一塁が与えられる、すべての走者はボークにより 1 個の塁が与えられる。

【注】の解釈・・・**ボールデッド**、打者は一塁が与えられる、すべての走者はボークにより 1 個の塁が与えられる。

スクイズ・盗塁行為なし

【原注】の解釈…**ボールインプレイ**、プレイを流し打者アウトで得点を記録すると監督の選択権を認める。

【注】の解釈…**ボールデッド**、打者に一塁が与えられ、盗塁を企てた走者には1個の塁が与えられる。盗塁を企てていなかった走者と塁を明け渡さなくてもよい走者とは、妨害発生の瞬間に占有していた塁にとめおかれる。

(上記の**赤青色**は、筆者が付けたもの)

※2023年の競技者必携では、走者が三塁にいるときの捕手の打撃妨害が起きたケースを扱った問題が8問あった。その内容は、

スクイズ・盗塁行為なしのものが5問で、そのうち「**ボールインプレイ**」でプレイを流した出題が4問、「**ボールインプレイ**」と明記されたものが1問あった。また、

スクイズ・盗塁行為ありの問題が3問あり、明記はされていないが「**ボールデッド**」として処理されるであろうと考えられるものばかりであった。

では、競技者必携に出題されている問題の中で、スクイズ・盗塁行為なしで、6.01(c)【注2】の「**ボールデッド**」の解釈と異なる問題と解答を紹介しておこう。

問 2アウト走者二・三塁、打者はバットが捕手のミットに触れながらも右翼前に安打した。三塁走者は生還、二塁走者は一挙に本塁を突いたが、右翼手からの送球でタッグアウトとなった。このとき攻撃側の監督から、今のは打撃妨害だから、打撃妨害の方をとってほしいと申し出があった。どう処置したらよいか。

答 打者は打撃妨害されながらも一塁に生き、他の全走者も1個以上進塁しているので打撃妨害はなかったものと扱い、ボールインプレイで監督の選択権はなくなる。得点は1点が記録され攻守交代となる。(5.05b(3))

結論として、走者3塁時にスクイズ・盗塁行為なしの場合に捕手の打撃妨害があった場合は、【原注】のように**ボールインプレイ**でプレイを流し、プレイが終了した時点でタイムをかけて、攻撃側の不都合を取り除き、盗塁行為があった走者は1個の進塁を認め、打者は1塁へ進ませる。もし監督の選択権が生じる場合には権利を行使させて試合を再開させるべきだと考える。

2024/1/27

走者2・1塁で強い打球が3遊間に転がった。3塁手は打球に向かって素早く走っていった。2塁走者は3塁手を避けるために走路から本塁側に膨らみながら3塁手をよけながら3塁に走っていた。打球はレフトへ抜けて行き走者満塁となった。すると攻撃側の監督がタイムを要求してベンチから出てきた。そしてタイムをかけた球審に向かって歩き出しながら「走塁妨害云々」と話す声が塁審に聞こえてきた。塁審は監督の抗議を聞いた後に協議しては後手になると考え、走塁妨害になるかどうかをしっかりと見ていたことをはっきりさせるために「オブストラクションのことですか？」と確認して、監督を止めて球審と協議をした。走者は守備しようとする野手を避ける義務があり、そのために走路を迂回したことをみていたのでオブストラクションをとらなかったの、一応球審にそのことを告げ、監督に対して、先ほどの2塁走者が走路を迂回するようにして走ったのはオブストラクションには該当しないことを告げると監督は納得してすぐにベンチに引き上げていった。

3塁走者とぶつかる

2024/1/27

1アウト走者3塁、打者は空振りし、本塁に走り出していた3塁走者が挟まれて挟殺プレイとなった。捕手は3塁方向へ走者を追い込み3塁手に送球した。送球を捕球した3塁手に走者はスピードを落とすことなくぶつかっていったが3塁手は落球することなくダッグアウトにした。もし落球していたら塁審は守備妨害を取るつもりであったが、そのままアウトのコールをした。走者はタッグしようとする野手に対して走力を落とすことなくぶつかっていくことは許されないからである。

ボールが塁審に当たる

2024/1/28

走者なしで打球が右中間に行き、打者走者は1塁を蹴って2塁に向かった。塁審はピボットして1塁の触塁を確認した後、2塁でのプレイに備えるために打者走者に先駆けて2塁へ走った。外野手は慌てて2塁に送球した。2塁に入った内野手は送球を捕球できずにグラブに当ててはじいた。はじかれたボールが塁審の体に当たってしまった。そのままプレイは続けられたのであるが、試合後の反省会であれば審判の妨害に当たるのかどうかあえて聞いてみた。すると「審判の妨害には当たらず、審判は石ころである」という意見で一致していた。私は「審判は石ころ」という表現は好きではないので「では、審判の妨害になる場合はどのようなケースか」を聞いてみた。すぐに答えが出てこなかつ

たのは残念であったが、審判の妨害は2種類あることを確認しておいた。「捕手の送球を球審が妨害したとき」「内野内に位置していた塁審に野手に触れていない打球が当たったとき」であることを覚えておこう。

珍しいボーク

2024/1/28

中学生の試合で球審に入った試合での出来事である。走者1塁で左投手がセットポジションから軸足を外さないで1塁へ牽制球を送球した。球審がボークをコールし、守備側のベンチに「今のボーク、わかりましたか？」と聞くと監督が分かったとうなずいてくれたので説明を省略して、走者を2塁へ進めて試合を再開した。試合後、控えの審判員からあのボークはどんなボークだったのかと質問されたので、踏み出したつもりの右足がかなり本塁寄りに踏み出して送球したのでボークをとったことを伝えた。アマチュアでは、踏み出す足の開きが45度以内という以前から取り決めがあり、今回の場合は余りにも本塁寄りに踏み出しての送球だったのでボークをとったことを伝えた。そのついでに、ボークをとった送球が悪送球になって転々とした場合と1塁手が送球をキャッチした場合との違いはどうかという話もしておいた。

例えば、ボークの送球を1塁手がキャッチしたが1塁走者は帰塁することなく2塁に走った場合には、1塁手が2塁に送球してアウトにしようとしても、タイムをかけてプレイを止め、ボークにより走者2塁で試合を再開すること。

また、1塁手が送球を後逸した場合は、プレイを流して走者は3塁を狙うこともできるが、安全進塁権を得たのは次の塁までなので、危険を賭して3塁を狙ってタッグされればアウトになることも伝えておいた。

どうしてDH制は生まれたのか

2024/2/5

今までの試合でDH制を採用していなかった関係で理解が不十分な仲間も少なくないだろうという事が話題に上っていたので、ウィキペディアでまずDH制の歴史を調べてみると

1972年、過度な投高打低状態にあったアメリカンリーグでは、12球団のうち9球団が、年間観客動員数が100万人を割る状態であった。1973年よりア・リーグで初めてDH制が採用された。(オークランド・アスレックスのオーナーだったチャーリー・フィンリーらのアイディアによる)

元来は商業的な理由でローカルルールとして定められたものであり、投手の安全や健康管理をする趣旨ではなかった。DHとして最初に打席に立ったのはニューヨーク・ヤンキースのロン・グルームバークであった。

2020年はナ・リーグでも新型コロナウイルス感染症対策としてDH制が導入された。2021年は再びDHなしに戻ったが、2022年よりDH制を導入。

日本ではパリーグも人気低迷の打開策として1975年からDH制を導入している。またWBCなど多くの国際試合でもDH制は導入されているという事であった。

MLBでは、2023年から先発投手と指名打者として二刀流(両方)で試合に出場できる大谷ルールが導入された。この場合は別々の選手として扱われる。

では、全軟連のプリントを利用して、DH制の特徴についてまとめてみよう。

(1)指名打者のルール

- ① チームは、**投手に代わって**打つ打者(指名打者)を指名することができる。
- ② チームは、必ずしも指名打者を指名しなくてもよいが、試合前に指名しなかったときは、その試合で指名打者を使うことはできない。
- ③ 試合開始前に交換された打順表に記載された指名打者は、**相手チームの先発投手に対して少なくとも1度は、打撃を完了しなければ交代できない。**
ただし、その先発投手が交代したときは、その必要はない。
- ④ 指名打者に代えて代打者を使ってもよい。その代打者は以後指名打者となる。退いた指名打者は、再び試合には出場できない。
- ⑤ 指名打者に代えて代走者を使ってもよい。その代走者は以後指名打者となる。**指名打者が代走者になることはできない。ただし、臨時代走者になることはできる。**
- ⑥ 指名打者は、打順表の中でその番が固定されており、多様な交代によって打順を変えることはできない。
- ⑦ チームは、指名打者に投手を指名することができる。
- ⑧ 先発投手、指名打者として二刀流(両方)で試合に出場する場合には、別々の選手として扱う。
- ⑨ 監督は、打順表に10名の選手を記載する。1つは先発投手として、もう1つは指名打者として。
- ⑩ 二刀流選手は先発投手として交代しても、引き続き指名打者として出場できる。
- ⑪ 二刀流選手は指名打者として交代しても、引き続き先発投手として出場できる。
- ⑫ 二刀流選手が両方同時に交代する場合には、他の二刀流選手との交代は認められない。二刀流選手の出場は、試合開始前だけに限られる。

(2)指名打者の役割が消滅する場合は、次のとおりである。

- ① 指名打者が守備についてた場合。この場合、投手は退いた守備者の打順を受け継ぐ。
- ② 投手が他の守備についてた場合。
- ③ 代打者または代走者が試合に出て、そのまま投手となった場合。
- ④ 投手が指名打者の代打者または代走者になった場合。
- ⑤ 他の守備位置についていたプレーヤーが投手になった場合。
- ⑥ 登板中または新しく出場する投手を打順表に入れた場合。
- ⑦ 二刀流選手が指名打者から投手以外の他の守備位置についてた場合、それ以降指名打者の役割は消滅する。

友人との会話

2024/3/10

懐かしい友人 M 氏と電話で話していると、「今日、軟連のブロック講習会に参加してきました」というので、どんな内容なのか聞いてみると、ストライクの横振りができるようになったと教えてくれた。昨年の講習会では、アウトのパンチアウトやストライクスリーのアクションが解禁されたが、ストライクの横振りはまだ禁止されていた。ついに横振りができることになったそうで、このことから「ロン・ルチアーノ」に話が発展していった。彼は名前からして分かるようにイタリア系のアメリカ人であり、MLB アメリカンリーグの審判員として活躍した人物である。先ほど話題に挙がった横振りは、このロンがやり始めたメカニックである。アウトのコールのときにバキューンと拳銃を打つしぐさで話題を呼び、これが審判員の間でも人気となって広まった経緯がある。ストライクのコールのメカニックを横に振ることで、捕手の送球を妨害する危険性を避ける為に今でも私はやり続けているが、やりだした頃は毎日、鏡の前で練習していたことを思い出す。恰好がいいからというだけならおすすめはしない。ボールから目を切りやすくなるので、それに対してどんなデメリットがあるのか、また、それを補うにはどうしたらよいかを考えて、ストライクを横振りに変えてみてはどうだろうか？残念ながらロンは自分の手で人生の幕を引いた人でもある。著書に「アンパイアの逆襲」があるので、当時のメジャーの審判の様子的一端をうかがうことができる。

また、昨年からは軟連でもストライクスリーのオーバーアクションが解禁になったが、かつてパリーグ審判員の露崎元弥氏は、このオーバーアクションでファンやマスコミから人気があったが、ロンとは違った悲運を受け入れざるを得なかった人物である。当時はセパの審判員でオーバーアクションをする審判はいなかったことから、審判部の仲間から白い目で見られ、ついには職場を去らざるを得なかったのである。

昨年のブロック講習会では、アウトのたたきやストライク3のオーバーアクションが解禁となったが、今年はストライクの横振りも解禁となり、一挙に大幅改革のイメージである。タイムのメカニックも指を広げて大きく見せるようになった。また、投手のグラブは、大谷グラブが全国の小学校に寄付されたことから、アマチュアもツートンカラーがOKとなった。

今年の野球規則の改正については、我々が注意を要する内容は取り立ててないようである。

さて、この講習会で表題の改訂が伝達されたので、その内容をまとめてみた。

1 投手の12秒および20秒ルールの取り扱い基準について

◎ 12秒および20秒の計時は、投手がボールを所持し、打者がバッターボックスに入って投手に面したときに始まり、投手が投球動作を開始したときに終わる。

◎ 20秒ルールの適用は、1度目および2度目であっても3度目と同様に「タイム」を宣告してボールデッドとする。「タイム」の宣告にかかわらず投手が投球した後のプレイは無効とする。

これは、12秒の場合は13秒で、20秒の場合は21秒でプレイを止める。投手板を外しただけのときや偽投のときは計時を継続し、塁に送球された場合は再度改めて計測するそうである。12秒ルールの場合は1度目からボールをコールすることとなり、20秒ルールの場合3度目以降はボールをコールすることになる。詳しくは必携のP10～11を参照。

2 スポーツマンシップの徹底……必携P12参照。

3 シートノック……(5)を追加、必携P35

シートノックを行うことができない補助員もいることから、ベンチ前でのサイドノックを認める。

4 ベンチ前でのキャッチボール……必携P44（昨年の20を19として改正）

次のイニングに引き続き投げる投手は、ベンチ正面でのキャッチボールを禁止するが、ベンチ外野側角からポール方向のファウルテリトリーでの軽いキャッチボールは認める。また、ブルペンでのキャッチボールは2組4名以内を認める。

5 学童部、少年部、女子大会の監督、コーチ……必携P41

20歳以上でなければならない。（成人者は18以上であることからの変更）

6 抗議権を有する者……必携P40

監督か当該プレーヤーのいずれか1名。（主将は除外）

7 指名打者の取り扱い……必携 P54

連盟が主催する大会においては、指名打者ルールを使用することができる。ただし、学童部、少年部、女子大会は、二刀流を採用しない。

8 試合中、控え選手がグラウンドでできること……必携 P57

◎攻守交代時にファウルグラウンドで外野方向へのランニングをすること。

◎攻守交代時に自チームの練習をベンチ前で見守ること。ただし、球審の「プレイ」宣告までにはベンチに戻ること。(去年はベンチ内で見守るようになっていた)

◎攻守交代時に外野手とキャッチボールをすること。

9 守備側のタイムの回数制限……必携 P58

◎5.10 ℓ (2)「監督またはコーチが、1 イニングに同一投手のもとへ2度目に行けば、その投手は自動的に試合から退かなければならない。」は適用しない。

◎投手交代の場合、投手と捕手の打ち合わせ（サインの確認）のために、準備投球の前あるいは後に少しだけ会話することは、捕手または内野手の回数には含まない。

10 没収試合の防止に向けて……必携 P73～79 参照

11 質疑応答

問答 19 【P103】 (昨年問答 25 【P111】 選択権)

問答 42 【P110】 (昨年問答 42 【P116】 リタッチ)

問答 187 【P149】 (昨年問答 187 【P156】 5.10 ℓ (2)を適用しないための変更)

問答 52 【P165】 (昨年問答 52 【P171】 オブストラクション)

12 ヒット・バイ・ピッチ (死球) の判定……必携 P217

「競技者必携 2023 以前には「打者が投球を避けようとするのが条件である。(身体が打者席の捕手寄りではなく後方に移動すること)と記載されていたが、() 内下線部を削除する。」と講師から説明があり。また、打者がよけなくてもバッターボックス内にいる打者に投球を当てる方が悪いのであるから、基本的に投球が身体に当たればヒット・バイ・ピッチであるという説明であった。打者がよけることができない場合は当然あり、ボックス内に投球されたボールは死球にするべきだという積極性が伺える。